東方冴月録

弓山涼

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然見知らぬ場所、幻想郷に迷い込んでしまった一人の男が、いろいろなことに振り回されながら、自分が迷い込んだ理由を探っていく、東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。

気を付けるようにはしますが、若干のキャラ崩壊もあるかもしれないので、ご了承下さい。

目次

幻想入りと妖精大乱闘 ―― 1
新生活と半人半霊の庭師 ―― 7

幻想入りと妖精大乱闘

「ここは…どこだ…？」

突然だが、気が付くと知らない場所にいるという経験はあるだろうか。少なくとも俺は今までの人生で経験したことはなかった。今日までは…

俺の名前は赤月灯魔（あかつきとうま）、一応高校3年生で、今年卒業を控えていた。そのため、卒業旅行ということで、一人で秘湯巡りをしていた。本当なら仲の良い友人と二人で行く予定だったのだが、その友人が突然用事で行けなくなったため、一人で巡ることにしたのだ。

ということで俺は今3つ目の秘湯に訪れている…

「はずだったんだが、ここは本当にどこだろう…？森の中…のようだが、俺はこんなところ来たことないぞ…」

少し辺りを調べて見ようと、足を動かしたその時。

バシッ！

ヒュ！

ドーン！

明らかに普通ではない音がしたあと、続けて複数の叫び声や悲鳴が聞こえた。
「なんだ?今の音…」
嫌な予感がしつつも、俺は音のした方向へと向かった。
向かった先には湖があった。とても大きな湖で、奥の方に、館のような建物がある。そしてその湖に、数十、いやおそらく百すら超える何かが飛び回っていた。羽がついており、キラキラとした輝くオーラを出していることから、まず間違いなく人間ではない。
「なんだろうか…飛んでる時点で信じられないが…姿形からして、妖精かなにかだろうか…」
しかし…
数々のなにかが飛び交い、うめき声や悲鳴が聞こえるようなこの状況、あまり良い状況とは呼べない。
「さっさと立ち去って、別の場所に…」
立ち去ろうとしたその時…
「誰!?」
(まずい、気付かれたか?)
どうやら、一匹の妖精に気付かれたようだ。
「あなたは人間?それとも妖怪?どっちでもいいわ、この場に居合わせた以上、あなたに

は眠ってもらうわ！」
　そういうとその妖精は、俺に向かって攻撃をしてきた。
「うわっ！」
　驚きつつも、俺は咄嗟に右に飛び、攻撃を避けた。
「へぇ、なかなかやるのね、あなた。なら、アイツらにも手伝ってもらおうかしら」
　妖精はそう言うと、飛び回っている他の妖精達を挑発するように、攻撃を飛ばした。
「突然なにすんのよ！」
「私に攻撃するとはいい度胸ね！」
「あなた、ただじゃおかないわよ！」
　口々にそんなことを言うと、数十匹の妖精がこちらに向かって攻撃をしてきた。
（この数はまずい！）
　しかしもはや手遅れ。四方八方から飛んでくる妖精達の攻撃を避ける手段はない。
万事休す。
（くそ…もう岩でもなんでもいいから、防御できるものがほしかった…）
　覚悟を決め、なるべく急所を守れる姿勢を取り、腕で防御をしたその時。
　ガキンッ！
（なんだ、今の音？なにか硬いものがぶつかりあうような…）

「なんで…腕に…負け…」
（腕？なんのことだ？…て）
「なんだ…？これ…」
俺の視線の先には、まるで岩の如く硬化した、俺の右腕。
「これは…俺がやったのか…？」
そう思った時、右腕の硬化がとけ、普通の腕に戻った。
（どういうことだ…？まさかさっき、岩でもあればいいのにと思ったからか…？ならもう一度…）
そして、もう一度腕が岩のようになるよう、頭のなかでイメージすると、本当にまた岩のように硬くなった。
「はっ…ははは…これなら…なんとかなりそうだ！」
そうして気合を入れ、俺は攻撃のために地上へ降りてきていた妖精達に一気に近づき、硬化した腕で何匹か殴り倒した。
「ぐっ…ただの人間じゃ…なかったの…か…」
妖精達は次々と倒れていったが、俺が飛べないことは気づいているらしく、やがて多くの妖精が再び空中に戻り始めた。
「なるほど…手加減はできないみたいね。でも、飛べないなら空から攻撃すればいいだ

けよ！」

そう言うと妖精達は、俺にむかって光る何かを放って来た。

（くそ…攻撃には耐えられるが、こちらから攻撃が出来ない…。俺も空が飛べれば…）

そう思った瞬間、俺の体はゆっくりと宙に浮いていた。

「えっ…？」

考えるよりも先に、戸惑いの声が漏れていた。

「飛んでる…？」

（なんでだ…？俺の力は腕を硬化させるだけじゃなかったのか…？まさか、俺が「空を飛べたら」と思ったからか？ならもしかして…）

試しに俺は、妖精達に手のひらを向け、手から炎が出るのをイメージした。すると、想像したのと同時に、手から熱い炎が放射された。

「なっ…！」

咄嗟のことで対応出来なかった妖精達は、数十匹がまともに攻撃をくらい、地に落ちた。

「あなた…一体…」

攻撃を避けた妖精達も、とても混乱しているらしく、こちらに攻撃をしようとせず、様子を見ているようだった。

（なるほど…これで確信した。俺の力は腕を硬化させることでも、宙に浮くことでもない。俺の本当の力は…）

「ははっ…」

俺はその時、自分の顔から笑みがこぼれていたことに気づかなかった。

数分後。湖に広がっていたのは、百匹はいたはずの妖精達が、たった一人の男に、ものの数分で全員倒された光景だった。

新生活と半人半霊の庭師

妖精達との乱闘から一週間程が過ぎた。俺は相変わらず初めて見るものばかりのこの世界のことについて調べ回っている最中だった。その中で、いくつかわかったことがある。

まずこの世界のことだが、ここはどうやら幻想郷という場所らしい。幻想郷には人間の他にも、妖精、妖怪、神など、様々な種族が存在するらしく、基本的には平和な世界らしい。ただ、たまに俺が巻き込まれたような、あまり平和的ではない状況になることもあり、そういう事件なんかのことを、「異変」というらしい。ちなみにこの世界のことは、「人里」というところで寝床をかしてもらっている家の主人から聞いた。

次に、俺の能力についてだ。これもその主人から聞いたことだが、この世界に住んでいる様々な種族の中で俺が持っているような、特殊な能力を持っている奴らがいるらしい。そして、その主人に俺の能力のことを話したところ、俺の能力はおそらく【想像が現実になる程度の能力】だということがわかった。これに関しては、妖精達との乱闘の時になんとなくわかってはいた。

というわけで、とりあえず今分かっているのはこんなところだ。それにしても…

「居心地悪いなぁ～…」

主人に頼まれ、食料の買い出しに来ていた店の近くで、俺は小声でつぶやいた。

今俺は主人の家で、一応平和に生活をしているが、人里の人間達の俺への態度がよそよそしい。どうやら妖精達との乱闘の際、俺が百匹以上いた妖精達を数分で片付けるその様子を、数人の人間に見られていたらしく、今俺は人里で、『化物のような力を持つ、謎の男』という風に噂されているらしい。

「早めに新しい寝床を見つけないとな…」

そう言いながら、買い物を済ませて帰ろうとした時、後ろから突然声をかけられた。

「すみません。ちょっといいですか?」

俺が声のした方を振り返ると、そこには、短めの銀髪で、学校の制服のような緑色の服を来た少女が立っていた。なぜか腰には刀が二本携えており、少女の横には、綿飴のような白いものがふわふわと浮かんでいた。

「えっと…あの…どちら様ですか?」

「私は魂魄妖夢といいます。突然ですみませんが、最近人里で噂になっている「謎の男」とはあなたのことですか?」

妖夢というその少女は、俺があまり聞かれたくない事を、遠慮する素振りもなくズ

バッと聞いてきた。
「ええ、まあ…それがなにか？」
「やはりそうでしたか。私はあなたの噂を聞いて、白玉楼というところから来ました。それで、あなたは今どこに住んでいるんですか？」
なんだか少し不思議な少女だった。人の個人情報をここまでズバズバ尋ねてくるような少女を、少なくとも俺は見たことがない。
「この先のとある家の主人に寝床をかしてもらっています。お金もないので、宿屋などにも泊まれなくて。」
「なるほど。ならあなたにとってはとてもいい提案があります。」
「提案？」
次の言葉を発する直前、少女はニコッと笑顔を見せ、そして言った。
「これから白玉楼に来て、一緒に生活しませんか？」

～翌日～

結論から言えば、俺は妖夢という少女の提案に乗ることにした。もとの家の主人には、事の経緯を話し、今までのお礼をして、俺はこの白玉楼に来た住処を移した。ここ

に来るまでの道中、妖夢さんから聞いた話では、白玉楼には妖夢さんの主である、「西行寺幽々子」という女性がいるらしく、妖夢さんは白玉楼の「庭師」をしているらしい。ちなみに「幽々子」さんは、いわゆる「亡霊」らしく、人間ではないらしい。さらに妖夢さんも完全な人間ではないらしく、妖夢さんは「半人半霊」という、要するに幽霊と人間のハーフらしい。

さて、そんな話をしているうちに、俺達は白玉楼に到着した。

「ここが今日から灯魔さんの寝床になる、白玉楼です。」

妖夢さんは、目の前にある屋敷を指してそう言った。

「ここが…というか広っ！」

俺がそう叫ぶと、妖夢さんは少し笑って、説明を始めた。

「では、あなたのこれからの生活ですけど、あなたには二つやってもらいたいことがあります。」

「二つ？」

「はい。まず一つは、私の仕事を手伝ってもらいたいと思います。あなたには、定期的にこの屋敷を掃除してもらいたいんです。」

「はあ、なるほど。」

掃除くらいでここに住ませてくれるのかとも思ったが、屋敷の広さを再確認し、なか

なかの難易度だと理解した。それでも、ありがたい話だ。
「わかりました。じゃあ二つ目は…」
「はい。それについては少しここで待っていてください。」
そう言うと妖夢さんは、小走りでどこかへ行き、少しして戻ってきた。手にはなにか長いものを持っている。
「はい、どうぞ。」
妖夢さんは、手に持っていたものを、俺に渡してきた。
「これは…刀?」
「はい、あなたにはこれから毎日、刀の稽古をしてもらいます。」
「稽古…というかなんで刀?」
その疑問に、妖夢さんはすぐに答えてくれた。
「あなたの能力のことは、道中で聞いてだいたいわかりました。しかし、あなた自身も自覚はあると思いますが、あなたの能力は無敵です。もしあなたが悪の道を進もうと思えば、あなたのことを止められる者は、おそらくこの幻想郷には存在しないでしょう。」
「…」
わかってはいたが、他人の口からはっきり言われると、自分でも怖くなってくる。
「そこであなたには、その能力を制御する訓練をしていて欲しいんです。私があなたの

能力ことを信用できるようになるまで。」
「なるほど…わかりました、頑張ります。でも、それとこの刀になんの関係が…？」
「そういえばまだでした、あなたにやってもらいたいもう一つの仕事のことです。」
（そうだった。俺は二つのことをしてほしいと言われていたのだった。つまりこの刀は、その二つ目に関係しているのか。）
「あなたには、この白玉楼の警備もお願いしたいんです。」
「警備ですか？」
「はい。警備なので、場合によっては侵入者と戦闘をしなくてはならない時もあります。ですが、制御できる様になるまでは、能力での戦闘は控えて欲しいんです。なので、代わりの戦闘手段として、刀の稽古をして欲しいんです。」
「なるほど…。理由はわかりましたがなんで刀なんですか？。拳とかじゃ駄目なんですか？」
　すると妖夢さんは少し恥ずかしそうに笑って言った。
「私は刀しか教えてあげられないので」

　その後、この屋敷の主である、「幽々子」さんと対面した。桃色の髪の和服姿の女性で、

少し大人びた雰囲気だったが、亡くなった時の年齢は、俺や妖夢さんとそんなに変わらないらしい。ともかく、幽々子さんにも挨拶を済ませ、妖夢さんから案内をされた自分の部屋の中で、俺はこれからの事を考えた。

（さて、とりあえず安定した生活はしていけそうだが…。これからの目標を決めないとな…。）

三十分程考えて、これからの目標を二つ決めた。

一つ

幻想郷について、もっと多くの情報を手に入れる。

二つ

自分がどうしてこんなところに迷い込んでしまったのか、その原因を探す。

当分は、この二つのことを目標にして、この幻想郷で生活をしていこう。そう決断し、俺はゆっくりと眠りについた。